

[総合的な学習の時間]

児童の主体的・協働的な態度を育てる総合的な学習の時間の考察

—ふるさとの良さを生かして、販売体験を通して地域への愛着や誇りを高める実践(5, 6年)—

長田 凌央*

1 主題設定の理由

当校は山中に位置し全校児童45名の小規模校である。3, 4年生, 5, 6年生は複式学級であり, 異学年での関わりが多い。校区には, 日本百名水で有名な池がある。児童はクリーン作戦や地域学習で数多くその池に訪れているため「自分たちの池」という意識をもっている。また, 地域には池の湧き水を大切にす文化が根強く残っている。そのため, 池の湧き水は地域の宝であり, 感謝して水を使おうという意識をもつ児童が多い。

担任した児童にふるさとのイメージを尋ねた。すると「田舎」「高齢化社会が進んでいる」など将来の展望がなかなか見えてこなかった。ふるさとの良い所はどこか尋ねると「農業が盛んでニンジンやスイートコーンが美味しい」「名水百選で有名な池がある」など農業や自然についての意見が多数あった。つまり, ふるさとへの良さはあっても, 今までの情報や経験だけでは, 心から誇りに感じるとまでは至っていない。

酒井(2022)は『「出会う・調べる・提案する・作り上げる」活動は, 児童が粘り強く自らの学習を調整して調べ, 提案するとともに, 地域の人と自分の想いが重なり, 活動が自分事となった』と述べている。また, 『「少人数グループ」・「相手の立場の仕事」での活動は, 児童と地域の人々との心理的距離を縮め, 自分事として活動に取り組むために有効な手立て』と述べている。

学区には農家や関連する人々が多く居る。それらの方々と交流する中で, 地域の方と児童たちの心理的距離を縮め, ふるさとが抱えている課題を自分事として捉え, 課題解決に向けた活動を行うことが, 児童の主体的・協働的な態度の育成に繋がると考えた。

また須田(2021)は「身近な地域素材を取り上げ, 社会参画する活動を通して, 自分たちの活動が実際の地域社会にプラスの影響を与えていることが直に感じられる学習が児童の達成感を高める」と述べている。地域素材である農業を取り上げ, 地域社会にプラスの影響を与え, 達成感を感じることが, 児童に主体的・協働的な態度の成長と地域への愛着や誇りに繋がると考えた。

2 研究の目的

ふるさとの良さを調べ, 良さを実感し, 学んだことを生かして販売活動を行うことで社会に参画し, 人と触れ合うことによって相手の立場を考えた活動ができる。そして, 地域への愛着や誇りをさらに高めていく。こうした活動を通して, 主体的・協働的な態度を育てていくことを目的とする。

3 研究の方法

本研究では, 以下の3つの方法で, 研究の目的を明らかにすることを目指した。教育活動から得た児童の発言や作文, ワークシートにおける記述, 行動の変容などを分析し, 考察を行う。

(1) 地域の実情から課題設定(主体的)

当校の地域は安心できる作物を作ることができる素晴らしい環境があることから全国に15カ所しかない「環境王国」に指定されている。特に広大な大地に作付けされたスイートコーンや雪の下で約4カ月間寝かせ春に掘り起こす雪下ニンジン全国的に有名である。しかし近年は, 農家の高齢化が進んでいることや様々な業種が増えていることから農業関係の仕事をしている人の人口が昭和50年に比べて約1/3にまで減少している。このような現状から, 全国的に有名な

*津南町立芦ヶ崎小学校

ふるさとの農業が危機的状況であることを課題とし、その課題解決に向けた方法を考えていくことで、ふるさとの課題を自分事として捉えることができるようにしていく。

(2) 農家，JA，行政機関などの専門的知識をもった方との交流（協働的）

専門的な知識をもった方々との交流は児童の体験活動をより豊かなものにする。当校の校区は特に農業が盛んで、農家が多い。実際に農家とかかわっていく中で、農業に対する思いや課題を聞き取っていき、課題意識をもたせていく。他にもJAや行政と交流することで、今後のふるさとの農業のあり方や課題解決に向けた方法などを模索させる。

(3) 販売，発信活動を軸にした社会参画（主体的，協働的）

児童は農業について調べていくことを通して、学校畑を使って自分たちも農業に挑戦したいという願いをもつと考える。そこで農家から野菜の栽培方法について聞き、野菜作りをする機会を設定していく。栽培した野菜は直売所に置かせてもらうことで農家と同じ土俵にたたせてもらう。そして、農家の栽培した野菜と児童が栽培した野菜を比べることで、野菜作りの難しさや楽しさなど多くのことを感じさせる。また、直売所で販売することでお金を稼ぐ経験をする。作物を育て、利益を得ることで、児童に活動の意欲と達成感を味わわせる。

4 実践の概要と考察

本研究は令和4年度の5，6年生17名に対して、総合的な学習の時間に実践した活動の概要と考察である。

(1) 活動の構想

表1 総合的な学習の時間年間指導計画

主テーマ	水・食・農から考えるふるさと～小さな農家～	主テーマ	水・食・農から考えるふるさと～小さな農家～
4月	知る	11月	行動する
5月		12月	
6月		1月	考えを深める
7月		2月	
8月	かかわる	3月	協力先候補
9月		J A, 地域・保護者の農家, 行政機関	
10月			

上述したように、児童はふるさとへのイメージはマイナス面が多く挙がっていたが、地域のブランド品や湧き水を利用して地域で盛んな農業を軸に1年間の活動を構想した。(表1)

(2) 活動の実際と考察

① ふるさとの良さにある課題発見の場

1年間の初めの活動に地域の名産品である雪下ニンジンを食べる活動をした。雪下ニンジンは春になると給食の食材としても出てくる地域ではメジャーな食べ物であり、当然児童もよく食べていた。そんな背景を踏まえ、あえて雪下ニンジンを味わって食べてみることにした。児童は「他のにんじんと比べて色が濃い」「甘みが強いから何も付けなくてもおいしい」など、何気なく食べていた雪下ニンジンも意識して食べてみると普段と違って特別に感じる児童の姿があった。また、「雪下ニンジンってどうやって育てるの」「どうやって収穫してるの」などの疑問が生まれた。

次に、初めの活動で出てきた疑問を農家の方に質問する場を設定した。学校区で地域名産の雪下ニンジンを栽培している農家のAさん（以後、Aさん）のところへ児童がまとめた、雪下ニンジンの質問をした。児童が考えた質問内容は表2の通りだ。質問後児童は「池の水は名水百選の美味しい水だから野菜作りに向いている」「草取りなどは私たちにでもできる」など校区は野菜作りをする上で好条件であることや、自分たちにもできるのではないかと意欲を高めた児童の姿があった。

また、直接農家に話を聞くと、「農家が減少している」という地域の課題があることを知った。

表2 児童が考えた質問と答え

児童が考えた質問	農家Aさんの答え
野菜を育てる上で大切なことは。	多く手をかけすぎないこと。野菜は自分の力で美味しく成長する。草取りやわき芽を摘むなど育ちやすい環境を整えること。
甘い野菜を育てるのに大切なポイントは。	野菜にストレスを与えないことと、追熟という行程をすると甘みが増す。
名産のニンジンはどうしてみずみずしいの。	美味しい水をたっぷりあげることが大切。
水はどれくらいの頻度であるの。	夏は朝夕の2回。土が乾いたらたくさん美味しい水をあげる。

② 地域素材を生かした体験活動

地域の課題を見付けたことで、児童は農業について興味をもった。活動では栽培、収穫、販売の一連を体験することにした。農業の楽しさや難しさを自ら体験し発信していくことで、ふるさとの素晴らしさや農業の魅力を多くの方に伝えていくことを目指していこうという気持ちになった。

野菜作りを行う上で大切にしたいポイントは、学校畑に限られた範囲で育てられるということ、収穫時期が夏休み期間中にならないということの2点であった。これらのポイントと農家から聞いた情報を踏まえ、何を育てるか考えたところ、表3のようにピーマン、シシトウ、パプリカ、カボチャ、サツマイモ、ミズナの6種類が良いのではないかと意見がまとまった。

表3 栽培計画

	5月		6月			7月		8月		9月		10月		11月
ピーマン			水やり	水やり	水やり	収穫	収穫・販売		収穫・販売					
シシトウ			水やり	水やり	水やり									
パプリカ	畑作り	苗植え	畑の整備	畑の整備	畑の整備	水やり	水やり	収穫・販売						
カボチャ								収穫・追熟	追熟		販売			
サツマイモ						畑の整備	根返し		根返し		根返し		収穫・追熟	
ミズナ										畑作り	種植え	水やり	収穫	販売

ア 苗の準備

野菜の苗は、学校のお金を借りるという方法をとった。このような方法をとった理由に、児童に野菜作りを成功させ売上分から返金しなければならないという意識を作りたいからだった。

イ 畑の準備

学校畑の一部を借りて準備を行った。土作りに必要な肥料は、JAの方から聞いた肥料をまいた。家庭菜園の手伝いをしたことがある児童を中心に役割を決めて、草取り、肥料まき、耕し、畝作りの順番で行った。

ウ 野菜の世話

始めにピーマン、シシトウ、パプリカ、カボチャを植えた。植え方はAさんに聞いた方法で行った。野菜を植えてからは分担を決めて水やりを行った。児童は登校後ランドセルを教室に置くと、一目散に畑へ行き、成長の様子を観察していた。ピーマンとシシトウはぐんぐん成長した。そんな中、Aさんから「わき芽を摘むといい」と教わったがどれがわき芽なのか分からなくなる出来事が起こった。児童たちにどうするか尋ねると、「Aさんと呼んで見てもらおう」という結論になり、再び教えてもらうことになった。Aさんから教えてもらったことを基に栽培を続けた結果、7月13日初めてピーマンを収穫した。

秋の収穫を見込んでサツマイモ栽培も同時進行で行った。サツマイモの育て方については農家のMさん（以後Mさん）に聞くことにした。Mさんをお願いしようと思った理由は、イモ類を専門で育てているということと、県外出身で新潟県へ来てから農業を始めたという2点である。Aさんの時と同様に、Mさんにも質問内容を整理してから聞いた。

上記のことから、2名の農家から野菜の栽培方法を学び、野菜の様子を毎日観察するなど児童は自分たちの野菜を大切に育てようという主体的な意識をもつことができた。

エ 野菜の販売と付加価値の工夫

学校の近くにある温泉施設には野菜直売所エリアがある。このことを知っていた児童は「直売所に野菜を置かせてもらおう」とイメージを膨らませていた。過去にも観光パンフレットなどを温泉施設に置かせてもらっていた経験があった児童たちは、施設の方に説明したら置かせてもらえると考えていた。そして、児童たちが自分たちで温泉施設の方に説明をし、収穫した野菜を条件付きで置かせてもらうことが決まった。

（条件：売上の20%を支払うこと。パッケージやバーコードを用意すること）

直売所には児童が育てた野菜の他に、Aさんの野菜や他の農家の野菜が多く置かれている。より多くの方に買ってもらうには、他の農家とは違った良さを出さなければいけないという課題が発生した。児童たちと学校へ戻り、差別化を図るにはどうしたら良いかクラス会議を始めた。児童たちが考えたのはパッケージのデザインと看板設置の2点であった。直売所に置いてある野菜は全て、透明なビニール袋で包装されていた。児童たちは、包装されているパッケージのデザインを他との違いを出すことで、多くの方の目に留まるのではないかと考えた。看板は売り場に張り出すことで、目立たせる工夫であった。（写真1、2）

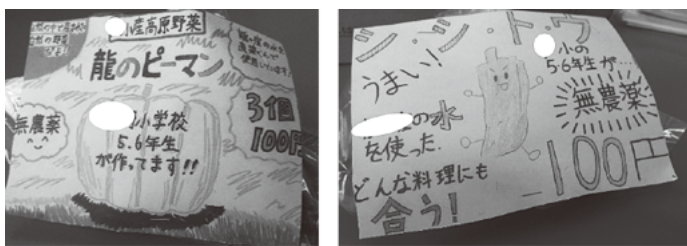


写真1 児童が考えた野菜のパッケージ 左ピーマン 右シシトウ



写真2 工夫した看板

看板には、生産者が小学生であること、名水百選で有名な湧き水を使って育てたことを強調した。パッケージには、一目で分かるように値段を大きく書いたりイラストを付けたりすることで他の商品と差別化を図ることができた。

【児童の感想】

- ・野菜を置いてもらえてすごく嬉しかったです。
- ・お昼に6個野菜を置いてもらいました。夕方に見に行ったら、残り1個になっていて嬉しかったです。
- ・自分たちの野菜が売れていると聞いてがんばってよかったです。

児童の感想を見ると、販売して利益を得た嬉しさよりも、多くの方に、自分たちが愛情込めて育てた野菜を認識されていることに嬉しさを感じているようであった。この気持ちが、販売で利益を得る＝達成感に繋がっていると考えた。

オ 購入者の感想

野菜を購入した方から感想を聞きたいと感じていた。そこで、野菜のパッケージの中に学校メールアドレスとそれをQRコードにして簡単に読み込めるような紙を同封することにした。

【実際に届いた感想の一部】

- ・ししとうは油で素揚げしていただきました。甘い身にびっくりしました。とても美味しかったです。ピーマンも皮も柔らかくて甘くて美味しかったです。上手に作りましたね、ありがとうございました。近くに直売所あったらいいのって思いました！本当に美味しかったです。新潟市在住 女性
- ・5・6年生の皆さんこんにちは。温泉施設に立ちよったときに「龍のピーマン」を買いました。実がツヤツヤでハリもある新せんなピーマン、ありがとうございました。ピーマンが大好きなので買ったその日にいためたり、にたりして食べました。みなさんのいっしょうけんめい育ててくださったのを感じ、とてもおいしかったです。また温泉施設にたちよったとき、みなさんのお野菜があったら買わせてもらいますね。それではお勉強に遊び、元気に取り組んでください。お体には気をつけてくださいね。

温泉施設は、観光名所の近くだったこともあり、地元以外のお客さんが多く購入してくださった。感想が届き、児童たちと今後更に多くの方に買ってもらうにはどうしたら良いか話し合った。児童はこの結果を踏まえ、「パッケージに書かれた説明文を生かした調理がされている」「オリジナルの商品名を付けたことが良かったのかも。」など肯定的な意見が多く出てきた。一方、地域の方から感想があまり届いていないことから「地域の方にももっと買ってほしい」という意見も出てきた。

カ 問題発見・解決

夏休みが終わり、追熟していたカボチャを直売所で販売することになった。しかし、この時期は他の農家も夏野菜が終わり、追熟していたカボチャを販売していた。しかも、夏休みが終わったこともあり観光客は少なく、直売所に置いたカボチャはほとんど売れ残っていた。児童たちとこの問題を解決するためにどうしたら良いか考えた。児童たちは「売れるのを祈ろう」「様子を見よう」など保守的な意見をもった児童と「広報誌や新聞に取り上げてもらって宣伝しよう」「値段を下げて小学生が愛情込めた野菜って宣伝しよう」など進歩的な意見をもった児童の二極化が見られた。結局、値段はそのままで小学生が育てた野菜としての価値を広報や新聞社を使って宣伝することにした。

結果的に、地元の広報誌に取り上げてもらい、地域に情報を発信することができた。(資料1)



資料1 広報誌に載った情報

温泉施設の直売所で地域の方に売れないという課題では、地域の秋祭りに参加して直接販売する方法が良いのではないかと意見が出た。このことを行政の方に話し、お願いすると快く了承いただき、出店を実現することができた。児童からは「出店するなら、大きな看板を作って私たちが作ったことを広めたい」「大きな声で呼び込みをしよう」などの声が続いてきた。このような様子から、課題に対して自分事として捉え、真剣に解決方法を探ろうとした。また、「稼ぐ」ということよりも多くの方に自分たちの活動を知ってもらいたいと思う児童が増えた。

キ 地域の秋祭りでの出店

地域の方にも自分たちが育てた野菜を知ってもらいたいと強く感じた児童たちは、秋に収穫予定のサツマイモとミズナをメインに販売することにした。また、サツマイモは焼き芋にして販売することで、より集客をねらうことになった。サツマイモ作りに協力していただいたMさんにこのことを相談すると、焼き芋焼き器を貸して下さることになり、より児童のやる気は向上した。

秋祭りでは17人を3チームに分け、呼び込み、休憩、販売を分担して行った。全員が順番に仕事を受け持つことで、直売所での販売では感じられないことを感じる事ができた。

【児童の感想】

- ・たくさんの方が買ってくれるのをみて、育ててよかったと思いました。
- ・大きな声で呼び込みをするのは少し恥ずかしかったけれど、お客さんが来てくれて嬉しかったです。
- ・Mさんが焼き芋焼き器を貸してくれたおかげで、たくさんの方に焼き芋を買ってもらえてよかった。

【地域の秋祭りに届いた感想】

- ・焼き芋とっても美味しかったです女の子たちのセールスの呼びかけも良かったです
- ・今日は秋祭りで焼き芋を買いました。とっても美味しかったです♪(^)夏には夏野菜をたくさん買わせていただきました。特に美味しかったのはししとうです。また食べたいです♪
- ・祭りでおいしい焼き芋をいただきありがとうございます。焼き芋は2歳の娘も喜んで食べていました。ちょうど良い大きさと食べやすく、ねっとり甘くて美味しかったです。

自分たちが育てた野菜を多くの方に知ってもらうために、必死に接客や呼び込みをする姿や児童の感想から、児童は地域の方と協力して、多くの人に活動の様子や農業について知ってもらおうと主体的に取り組んだことがわかった。多くの人に自分たちの活動を知ってもらうことで、販売で利益を得る＝達成感になった。

③ 今後のふるさとの農業を考察

農家や行政機関の方から、ふるさとの農業の現状について話を聞いた。行政機関の方からは、近年AIの技術やドローンなどを使って効率よく農業（スマート農業）をする技術が発達しているが、多くの費用がかかるため、地域の農家でも数軒しか導入ができていないという話を聞いた。スマート農業を導入することができれば、効率よく農業ができるため、農家や働き手が不足していても補うことができる。しかし現段階では、すべての農家に導入することは難しいという現実を学ぶことができた。

この現状を踏まえ、ふるさとの良さである農業を守るために、自分たちができることや思ったことについて考えた。

【児童の作文より】

- ・地元の野菜を選んで購入したい。スマート農業もいいけれど、できるだけお金をかけずに、ふるさとのきれいな自然を使って栽培したほうが、環境や人に優しくていいと思う。手間をかけた分、達成感を感じられる。
- ・ふるさとの農業の良さ、ふるさとの野菜の魅力を色々な人に知ってもらいたいし、伝えていきたい。

児童の感想からは、ふるさとの農業を守るために「地産地消」「達成感」「感謝」というキーワードが多く見えた。また、農業の一連を経験したことで、今まで他人事と考えていた児童も農業を守りたいと自分事として考える意識が生まれていることがわかった。

最後の活動で、今後ふるさとの農業とどのように関わっていききたいか作文を書かせた。今後も農業を続けたいか考える児童は16人中11人。農家として働いてみたいと回答したのは5名いた。また、「農業はしない」と答えた児童も全員、ふるさとの農業には関心をもって、「県外に住んでも地元の野菜を買いたい」「地元以外の友達にふるさとの野菜を紹介したい」など、地域への愛着や誇りが高まった。

【児童の作文より】

- ・ふるさとの農業は日本の誇りでもあると思うので、自分の地元を誇りに思います。ふるさとの農業がこれから先ももっと発展していけるように、自分で野菜を育てて販売したり農家の手伝いをしたりして関わっていききたいです。
- ・僕は農業が好きです。AIを使った農業をしてみたいです。
- ・正直自分たちだけでは野菜の栽培、販売は無理だと思っていました。でも、野菜の栽培をしていると楽しくなってきたので、毎朝観察をしたり休日も水やりに行ったりしました。今後は、農家に感謝して野菜を食べたり自分で野菜を育てたりしていききたいです。
- ・地元の農業はとてすごいです。農業を体験して、農業の大切さや大変さを学びました。私は将来、農家にはならないと思うけれど、野菜を育てている農家に感謝して野菜を食べたいと思います。

5 成果

○地域の実情からの課題設定

地域の農家から、野菜の作り方や農業の実情について聞いた体験では、ふるさとが農業をする上で最適な環境やふるさとの農家が減少傾向にあり、危機的状况であることを学んだ。児童はこのことを知ると、自分たちも農業をしてみたいと感じ活動を始めた。畑を耕し、育てる作物を考えるなど主体的に取り組む姿が年間を通じて見られた。また、ふるさとの自慢である農業が、危機的状况であることを知ったことで、児童はふるさとの課題を自分事として捉え、「僕は農業が好きです。AI農業をしてみたい」「農家にはならないと思うけれど、野菜を育てている農家に感謝して野菜を食べたい」など自分は今後どのようにふるさとの農業と関わっていききたいか考える姿が見られた。

○専門知識をもった方との交流

農家やJAの方と交流したことで、農業の難しさや毎日の世話が大切だと学んだ。その後の活動では、児童は役割を決め、毎日欠かさずに行うことを目標に取り組んだ。畑へ行けない児童がいると、代わりに違う児童が行って、お互いに協力して野菜作りに取り組む姿が見られた。また、家の手伝いで、今までに経験があった児童は耕耘機を使って土作りをしたり、肥料のまき方を教えたりした。経験の無い児童は教わりながら草取りをしたり、野菜の変化を良く見取ったりして、お互いのが自分にできることを探して活動に取り組む姿があった。専門知識をもった方との交流が、児童の野菜作りへの意識を変え、より主体的・協働的に取り組むきっかけとなった。

○販売、発信活動を軸にした社会参画

育てた野菜を販売する活動で、児童は野菜が売れると、よりやる気を出して活動に取り組んだ。逆に、野菜が売れ残っていると、理由を考えたり解決策を考えたりし、野菜を販売するという目標に向かって全員が自分事として捉える意識ができた。また、消費者から感想が届くと、これまでの活動に対する達成感や農業の面白さを感じている児童が多かった。この一連を経験したことで、栽培、販売という分かりやすい目標に対して全員が工夫したり協力したりすることができた。販売、発信を軸にした社会参画は、児童の姿から主体的・協働的な態度が向上したと言える。

6 今後の課題

本実践は地域素材である農業を通して、販売、発信活動を軸に行った。地域の農家や専門知識をもった方と交流し、活動を進めたことで、児童の主体的・協働的な態度の成長があった。しかし、販売では、利益が増えるにつれ、利益に意識が行ってしまい、ふるさとへの愛着や誇りに対しての気持ちが少し薄れてしまうことがあった。利益ではなく、収穫量や宣伝方法の工夫などに着目し、より主体的・協働的に取り組む方法を模索する必要がある。また、発信活動では、地元の広報誌や新聞にとどまってしまった。これでは発信活動としては不十分であったと感じる。今後は、もっと多くの方にふるさとの良さを伝えられるよう、発信活動の充実を図る必要もある。

引用・参考文献

- ・酒井佑輔『小学校高学年の総合的な学習の時間における児童の学習意欲の変容を促す指導の在り方に関する実践的研究－単元全体を通じた「価値ある体験活動」の工夫－』（教育実践研究 第32集）2022年、pp.229～234
- ・須田亮子『総合的な学習の時間における児童の達成感を高める指導の在り方－地域素材「直江津駅」における社会参画を通して－』（教育実践研究 第31集）2021年、pp.235～240